

現是なりとて、委く此湯の功能をも記せり、功能は然も言なれど、上件の趣に、二柱神の此所に湯を出し給ひけむ古傳の遺れるに、例の佛風の説どもを打交へて妄説せる物と見えたり、二柱神を薬師と申せらる、と更に珍らしからず、

〔東海道名所記〕社走湯現より西のかた一里ばかりに温泉あり、熱海と名づく、うしほのみちひにしたがひて、岩のはざまより煙むしあがりて、ことの外にあつき湯出てはしるを、筧にて家々にとり、槽にた、へて人々に入せ侍る、よろづの病によしといふ、

〔東海道名所圖會〕五熱海温泉走湯山の方一里にあり、潮の満干に隨ひ、岩のはざまより湯氣人入湯す、平左衛門、法齋湯、野中湯、風呂湯、川原湯、濱の湯等の名あり、土人云、湯の名を呼ば大に涌上るといふ、湯前權現は、上の町にあり、今宮權現七面祠、木宮明神、天神祠、柿本貴僧正の祠等、新宿りにあ

〔類聚名物考〕地理三十五、伊豆國賀茂郡熱海温泉記

情熱海なる出湯の年經りし由來を考へ侍るに、略中抑此里は、名にし負伊豆がねの尾にして、海邊より三丈餘り高き岡に、巖の底より自然鹽湯の涌出て、立登る煙りは富士淺間にもたぐへやは見ん、晝夜六度宛時に臨みては沸り出る響雷鳴かとあやしむ、溢れ流る、は大河の如し、かゝる不測の靈湯ありつれど、上代は民屋も乏く、知人なくて徒に幾年月をふりにたり、かくて孝謙天皇の天平勝寶元年己丑睦月ばかり、里の小童に神託て云はく、此高き岡に温泉あり、汲取て浴せよ、病成愈べしと、頓に小童は醒てか、りし事をも不知默然として眠る、こゝに村民等恭畏て、神の教のまに、湯槽を居置桶渡し、浴室を作曳入ゆあみしけるに、衆病愈て妙なる事神の如し、よりに清地を撰み、湯の上なる岩境に神籬を建、湯前神社を齋ひ、少彥名命を安鎮まつり敬ければ、里も榮へて、いや増に効驗なれば、千年の今猶絶すなん有ける、寛平四年、中納言紀長谷雄卿といひし博士、伊豆國の任なりしにや、來り給ひける時、温泉の源を探見んとて、數多の村民に命て掘穿けるに、滑石及開之熱湯沸出る事猶前の如し、かゝりしかば、恐退て止ぬとかや、元來神徳